

大隅諸島内集落の人口・社会変動

— 開拓・移住・消滅・新生・文化復興 —

長嶋俊介

Social Changes and Demographical Structure of the Villages in the Osumi Islands: Reclamation, Emigration, Extinction, Creation and Cultural Renaissance

NAGASHIMA Shunsuke

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

要旨

大隅 4 島内集落変動を、人口データ・歴史省察・現地聞き取りで追跡した。その成果に加え、屋久島では廃村後の新住民が展開した文化環境活動、種子島では甑島トシドンの移住先継承復活経緯、口永良部島では歴史資料作りの新たな取り組みと支援組織、馬毛島では再有人島登録後の直近データについてまとめた。

島嶼人口動態の平面的差異空間

地域人口の動態 (3 次元) を、平面 (2 次元) 分布で捉えるに、これほど極端で多様性が見られる地域事例は稀である。歴史性・地理性・移住受入環境・災害・文化継承・文化創造等に関する特異な空間性を各集落と島嶼が抱えている。

屋久島

全国の離島同様に高卒後進学・就職による社会減が牽引する長期人口減少傾向が顕著であった。営林署引揚後の小杉谷は廃村。一湊港の山間部集落白川山(しらこやま)

地区も営林署引揚後、人口減を経験するが、開拓者入植が入る。その後河川氾濫土石流で廃村になったが、ヒッピー的人材が入植し、文化発信・環境活動拠点化する。彼らも関わった森林保護活動成果もあり、1993年のユネスコ世界自然遺産登録がなされる。その時以降 I ターン受入（民宿・ガイド・自然愛好家・インテリ）、U ターン者新規事業展開（民宿・ガイド・土産物屋）、観光業・通信教育スクーリング業新規参入等で、安定化傾向が始まり 20 年近く続いている。島内循環道ができていいるせいもあり、また山間部側と海岸部側への面積的ゆとりもあり、島内ほぼ均等で、特定集落・地域のみが落ち込むという現象もない。第一次 I ターン世代が島民ガイド育成に取り組んでおり、それが人口減を食い止めてもいるなどの、全国的にも希有な展開が続いている。安定の中でも中心地と西部林道側の南北両地域で人口が減り、南・東部で増えているが、自然派志向的な社会形成と矛盾しない。

口永良部島

幕末期半年余りの短期間、英国密貿易基地であり、戦後行政分離時代も境界交易基地として特別な場所であった。硫黄産地・明治期及び戦後入植地として人口支持力も高く、集落は 20 近くに上り、1,500 人にも達した。ガジュツ生産もあり、屋久島属島としての地域格差に不満が高まり、分村運動も一時発生。硫黄産業衰退・火山大噴火を契機として、人口減少は加速化して、往時の 1 割。居住地はほぼ 2 地区に限定。ひょうたん島（山海）留学で、小中学存続を図る。高齢者学校での郷土資料収集展示施設が、恒常施設化して、地域の社会教育センターとして機能している。若者の振興会、それを支える「子孫代々の口永良部島を夢見る」年寄組が、適疎的展開（限界集落とは真逆）の歯車として廻り始めている。大学名誉教授等が居住し、外部大学関係者も関わった、特異な地域振興が始まりつつある。2007 年国立公園に組込まれたが、旧村落・歴史・火山・里生活等の新ガイド制も模索中である。

馬毛島

全国的にも数奇な人口変動を経験した島である。種子島池田・州之崎・漣（あま）泊住民の特権的漁業権（トビウオ等 1763 年）の季節定住地。明治初期土族の牛飼育地、1881 年国営緬羊飼育場、戦後入植 80 戸、製糖工場、北海道からの酪農移住も受け入れた。馬毛鹿食害・早魃・風害等で 358 人いた人口は急減を続ける。1979 年民間開発企業による用地買収が本格的に始まり 1980 年には無人島化。1985 年落雷火災（翌年バツタの異常発生）。2008 年住民登録人口 6 人、09 年 4 人、10 年 4 人、11 年 3 人全員男性により、再び有人島扱いになる。因みに 2005 年国調人口 15 人中女性 1 人全員建設業。2010 年国調人口は 11 人全員男性（建設業 10 人、製造業 1 人、全員第 2 次産業、全員 40 歳以上、耕地 0）である。

種子島

平成大合併でも熊毛郡唯一の複数自治体島。南部に宇宙開発事業団が基地を構え、地方財政の特異構造が、それに作用している。この島の人口減少率・変動は、自治体別（2005年～2010年国調、西表市 5.4%減、中種子町 6.8%減、南種子町 7.9%減）・集落・出身者集団・海岸部山間部・産業構造別等で多様である。藩政、牧の歴史、移住受入の歴史、移住者集団の推移、その文化継承、その編年史は一著を要するほどに興味深い事実にあふれている。明治・大正期は移住民を受け入れ続け、人口増が続いたが、昭和30年代から人口は減り続けている。明治期は17年山川から6戸、19～20年甌島から600余戸、19年坊津から19戸、28年徳之島から数戸、沖永良部島（台風・旱魃）集団移住。30年香川から10戸、大分・静岡。さらに喜界島・奄美大島・与論島・沖縄・ヤマト本土等等々である。そして大正3年桜島大噴火で2,753人（桜島元人口の27%相当）を受け入れ、2014年移住100年碑設置。種子島中央部の南北に走る背骨地（台地・旧牧場・大森林地）が主たる引き受け場所で、田畑地帯に点々と集落が作られた。明治初期の場合は特に西之表に集中し、99集落中30集落がその移住集落である。甌島移住は台風餓死が言われているが、実は中毒等による病死者であった。明治期から国庫補助もあり人口増は島の発展と前向きに歓迎された。土地の余裕も与かっている。甌島からの移住集落ではトシドンが継承されている。野木之平は公民館に「トシドンの里」を掲げている。子どもも大人もユネスコ無形文化遺産指定を知らない。甌島との交流意欲はあるが行ったことのある人は稀である。100周年でトシドン復活を遂げた集落（鞍勇くらざみ）もある。香川・大分との混住集落だが、下甌島出身者に関わらず2014年末でも今も新たに熱心である。

まとめにかえて

種子島への移住史に関して地元記録は多いが、まだ総括的な図書刊行にまでは至っていない。地元高校郷土部も取り組んでいるが、興味深く意義深い歴史展開であるので、組織的で体系的な記録保存が望まれる。口之永良部は災害史的整理の他に、境界離島の典型的な編年拠点としても重要調査地である。地元資料も整いつつあるので、プロによる支援が必要とされている。馬毛島は開発が極度に進み、生態系記録・集落史・教育史・産業史などの記録的保存危機にある。この公的手当も不可欠である。屋久島は法文学部桑原研究室による小杉谷集落間の移住者調査がなされている。白川山インテリ集落の歴史は地元居住者の間にあっても、必ずしも正確な記録化がなされていない。旧上屋久町では（屋久町とは異なり）村落郷土誌が欠落している。今からでもその整理と保存措置が急務である。